同　窓　会

井上修一
文芸・言語学系教授

年齢のせいなのか，最近むやみに同窓会の通知が多い。小学校のものから大学のものまであって，しかもそれが学年単位であったりクラス単位であったりするからまことにややこしい。もともと同窓会があまり好きな方ではないので，案内状をうっとうしく思うこともある。

同窓会が好きでなくなったのには理由がある。高校生のときたしか太宰治の『同窓会』という短編小説を読んで，同窓会というものが持つ嫌味な一面を教えられたからである。作品中の同窓会では後の人生が順調に行った人々だけが出席し，その場にいない旧友たちの情報を交換しては自分たちの出世を確認しあっていた。

太宰でなくても同窓会にその種の臭いを嗅ぎ取って，出席を躊躇している人は案外に多いのではないかと思う。昔の友達には会いたいが，肩書きをひけらかしては喜びを抑え切れないでいるかつての友人を目にしなければならないのは興ざめである。

私の場合，3，40代のころの大学の同窓会にその傾向が強かった。忙しくて暇がないことを半ば嘆き半ば吹聴しながら，所属企業の好況振りや社内における順調な昇進をそれとなく仄めかす友がいた。「今日は成田から直接来たんだ」とか，「明日バンコクに立ちます」などという威勢のよい言葉が挨拶代わりに飛び交っていた。同窓生たちが忙しかったのは事実である。11時前に帰宅することなどは到底望めない状況だった。かれらは文字通りの選ばれた企業戦士だったのである。

しかし私は企業戦士になった友人たちのそんな姿に，いつも多少の違和感を覚えていた。かれらの人生が本人たちが信じているほど有意義には思えなかったのである。旧友たちはまじめに与えられた仕事に邁進していたが，その仕事が社会

にとって「何のために」なるかというようなことはあまり考えていなかった。忙しすぎてそんなことに気を遣う時間も心のゆとりもなかっただろう。

かれらが会社の仕事以外で関心を持ったことといえば，日々のニュースや子供の教育，住宅ローンの返済ぐらいだったと言えば苛酷過ぎるだろうか。学生時代には共に思想や芸術も論じ合ったが，かれらの多くは卒業と同時にそれらをきれいさっぱりと捨て去った。文学などは所詮青春の玩具に過ぎなかったのである。

十数年前のことになるが，日本が高品位テレビなるものを世界に先駆けて開発したことがある。テレビ画面の走査線の数が四百から六百だかに増えて，画像がそれまでよりもくっきりと映るようになった。ただ，それを一般家庭で楽しむためには，メーカーもテレビ放送局も一般家庭も，既存の設備の一新を迫られたのである。

投資する費用と得られる効果の関係に疑問を持ったオーストリアのテレビ局が，日本の某家電メーカーの研究所長にインタヴューを行ったことがある。高品位テレビが人類にもたらす幸福の度合いを測りかねていた質問者の問いに対して，所長は戸惑ったような表情をするだけで，何も答えることが出来なかった。質問の意味が飲み込めなかったのかもしれない。意地の悪い質問であるとは思ったが，日本の企業のトップ技術者が，自分たちの技術と社会との関係をふだん考えていないことが露呈されて，同じ日本人として恥ずかしく思ったものである。

たしかに「何のために」ばかりに気を取られていては，商品を開発したり販売するチャンスを逃してしまう。しかしこの哲学の無さが，国際社会におけるわが国の評価の低さに繋がっていることは間違いない。尊敬されないのである。

またこれもしばらく前のことだが，文芸雑誌の『群像』(1995年２月号）が江藤淳と上野千鶴子の二人に日本の家族についての対談をセットしたことがあった。江藤は当時の文芸評論家の第一人者で保守派知識人の代表格で知られ，上野は気鋭のマルクス主義的フェミニストで論争における切っ先の鋭さを武器にする。まことに見事な組み合わせである。

その中で忘れられないやり取りがあった。旧世代としてはフェミニズムに理解のある江藤が，「企業が就職や昇進，昇給に関して男女差をつけるのはおかしい。女性社員も男性社員と同じように能力に応じて評価すべきである」（筆者要約）と主張するのに対して，上野は，『わたしたちフェミニストの間ではその

議論はもう終わっています。いまわたしたちが男に要求しているのは，女たちのレベルまで降りてくることなのです。会社人間になり切らず，企業以外でも自己実現をするために，女のレベルまで降りて来なさいと言っているのです。しかしこのことの重要性に気がつく男が少なすぎます」（筆者要約）と嘆いた。

私はマルキストでもフェミニストでもないが，上野千鶴子のこの意見には大賛成である。男たちは会社に捧げる時間の一部を自分のために，家族や地域共同体のために使うべきなのである。日本の男たちの知性や倫理のレベルが大学卒業後あまり向上しないことは，本人や家族だけでなく，社会や国家にとっても大きな損失になるはずである。だいいち，知性がなくては中年男としての魅力に欠ける。そしてそうなった責任は個々の企業戦士にはない。挙げて企業社会そのものにある。政治家や企業経営者がいつまでもこのことに気付かないなら，男たちは遅れ馳せながら女性と共に企業社会に反旗を翻すべきである。

同窓会で出会う旧友たちがこのことに気が付いてくれたのは，50歳前後になってからである。具体的には一生を捧げてきた企業で，心ならずも役員に迎えられないことが判明してからであった。あるいは本社から子会社，関連会社に片道切符で出されてから，さらにはリストラにあってからであった。つまり会社に捨てられて初めて，会社だけが人生ではないことに思い至ったのである。

そのときから旧友たちはまた，自己の人生の実現に向かって覚束ない足取りで活動を始めた。そして配偶者の存在，家族の有り難さに覚醒する。新しい知性を大きく開花させるには歳を取りすぎているが，若い頃に芽を植え付けておいた領域で活動を開始する。旧友たちが企業戦士から裸の個人に戻るのである。肩書きなしに，会社の名前なしに，虚勢を捨てて集うようになる。再び本や映画の話が冷笑を受けずにできるようになる。

そういうわけで，50歳代になると同窓会が面白くなる。

（いのうえしゅういち　ドイツ文学専攻）